

この一人一句集は、二〇〇〇年のメモリアルとして企画したが、更に推し進めて二〇〇二年を継続の初年と位置づけ会員の要望に応える事とした。

中北海道現代俳句協会を拠どころとする作家集団として、このような形に残すことは、それぞれの個性を理解する上で、一歩踏み込んだ親交の広場が用意されたと言っていると思う。

それにしても、年間一句のみで自分を主張するということは、あまりにも象徴性が強く、作品の提示に迷いも多いと思うが、結局は最も独自性の濃い作品一句ということになるのではないかと考えられる。実はそのプロセスこそが相互の作句意欲を刺激し、作品の向上につながる筈であり、この作品集の意図もそこに収斂される。

現今、現代俳句の動向は、伝承俳句と一線を画すが、その他は個人の裁量に委ねられ、一時期より作品の裾野は広くなったが、より鮮度の高い作品を求めるのは、動かしがたい希求でもあるだろう。

そもそも作品の評価は短詩型のありかた、その認識のぶつかり合いであり、読者それぞれの落差の裡に作品が晒されることになるが、年間一句の重みを噛みしめ、動かしがたい己の一句を見せて欲しい

二〇〇二年二月 記

発行者 中北海道現代俳句協会

会長 五十嵐 秀彦

編集 中北海道現代俳句協会

広報部

発行 二〇〇二年四月一三日

中北海道現代俳句協会

二〇〇二年 一人一句集

冬晴れの夜の <small>こ</small> 盡 <small>と</small> 毒 <small>く</small> の <small>い</small> 戦 <small>く</small> 星 <small>さほし</small>	存在は刹那の連続 空蟬が鳴く	旭 太郎	青山 醉 鳴
おぼろの夜骨なきもののように寝る	炎天に人すこしづつ 醗 酵 す	阿 部 満 子	
蓮の花骨に刻んでゆく握手	真雁来て 空も湖も点描す	荒 川 弘 子	新 出 朝 子
こんなにも話したきことありさくら餅	たて笛の穴に西日のフアを探す	井 尾 良 子	有 田 裕 子
木星は春に薄らぎ 明 烏	螺旋階段ゆっくりついてくる寒さ	石 井 美 髯	五十嵐 秀 彦
		石 川 美 智 子	

秋便り誤字見つけたと孫笑顔	石本雪鬼
乱世の予感白虹秋天に	伊奈青人
天秤の少し傾く春愁	今堀冷子
白菊の献花オカリナ響きをり	上田すみ子
ビッグバン同じ時吸う紋白よ	白井千百
献体を終へたる君か雪ほたる	内野弓子
万里子逝き和子逝き曝書の熱り	江草一美
天国が漏れているからきつと春	Fよしと
工場のサイレンきらめく去年今年	遠藤静江
万緑や地鳴りの如く牛の尿	遠藤由紀子

うしろだけ雨に濡れたる立葵	大河原倫子
ポールペンこんなに卒業と書ける	大橋弘典
掃いても掃いても春落葉のような君	岡本順子
しみじみが象の昼寝にふり積もる	小川桂
春を待つ葉ばかりを溜め込んで	奥野ちあき
延胡索原始の森のオーケストラ	小田島清勝
冬そうび次の一步をどうしよう	小野田あさみ
胸に抱く赤子のねむり街師走	梶鴻風
忘れ潮練一びき生きている	柏田末子
夏至の日の机上を満たす世界地図	桂井俊子

かなかなはかなかなと鳴きかなと止む	金子兼三
スーパームーンどこかで海月裏返る	金子真理子
八月を背負い続けている少年	亀松澄江
鰯雲腹のところが焼けている	木下小町
響き合ふ朝の挨拶聖五月	蔵千英
靴音を追ひ越してゆく十二月	倉部仁子
顔面に起伏ありけり水眼鏡	栗山麻衣
鈴なりの柿よ音符になりなさい	黒田さち子
日差し恋ふ墓標のごとく大枯野	腰崎玲子
束の間の小春日香を聞いてみる	木南琴

八月は昭和ずっしり積み団子	小路裕子
まづ海に語る十年春の星	近藤由香子
正月や酔へば驚くほど笑顔	齋藤厚子
原子の火疎み狐火信じをり	齋藤雅美
峡一つ向こうの夜のほととぎす	齋藤嫩子
病みがちな夫人の行方クレマチス	坂本真紅
ツインベッドの子の軒冬ぬくし	佐藤和則
三面鏡寒紅濃ゆき魔女三人	佐藤紀代子
音楽が終る秋刀魚の骨残る	鹿岡真知子
ゆらゆらと何も言へないまま簾	島崎寛永

目で計り如月の雪掃いてます	白井節子
ことごとく根の張る雪の上に雪	信藤詔子
括るなら群青の紐冬支度	菅井美奈子
子の墓を磨きしときに小鳥来る	菅原湖舟
他人めく半顔も入れ白日傘	鈴木きみえ
糸尻に溜まる歲月去年今年	関根礼子
独唱の頭蓋のどこか芽吹いている	瀬戸優理子
いくへにも巡りてわたしの月になる	平倫子
初日影首たてに振る干支の牛	高垣卯八
去年今年分婉室の掛時計	谷花丸

初景色みるみる機影未来へと	田湯岬
ストーンサークルの沖の鯨が汐を吹く	津坂圭子
紅葉よ落葉よ山の身振りいに	辻脇系一
一本の棒が主役の落葉焚き	角田桑里
花の庭仰ぎて巡る散歩道	中田琢志
畳紙に母の文字あり赤のまま	中田真知子
セイウチの口笛とどくレノンの忌	長野君代
どこもやはらか手のひらで押す暮春	永野照子
風に乗る枯葉海へと一直線	中山ヒロ子
残る海猫眼下に縄文遺跡群	西井健治

子の息を形にすれば紙風船	西村山懂
はららごの正装海苔の帯しめて	林冬美
唐突に <small>きた</small> 来る空っぽ五月晴	原田昌克
菜の花や奈良に逢ひたき仏たち	檜垣桂子
荷の中に一筆箋と稻架干し米	東出従子
字余を背負っておりぬかたつむり	平尾知子
嫁の座をとくに離れて零余子飯	平川靖子
長き夜の口紅引いてテロリスト	廣田和久
月涼し白衣のままの父と居て	藤森そにあ
括らないくくれないコスモスは風	古川和

ひとしきり泣いては啜る葛湯かな注1	松王かをり
満月やいつも鹿を追いかける	三嶋渉
土地売れの話小耳に冬菜摘む	宮下美紗子
廃線は静かに埋まる冬夕焼	村上海斗
さよならの手がひらひらと冬日和	本ゆみ
雲の峯多喜二も整も玻璃の中	安田中彦
満州に散りしうからの徽の文	山本頼
連翹や世界史今日は黄禍論	横山いさを
木を彫れば容貌 <small>かた</small> となりぬ朧月	米山幸喜
触れたのは空耳ですか萱草	脇本文子

「あ」を少しふるわせてやる扇風機	脇本千尋
秋彼岸雀どつさり集める木	和佐尚子
春日傘ひらきカモメになりゆく	渡辺のり子
注1 9頁一句目・「葛」の下部「亼」は「ヒ」	